私の対空戦闘体験

山門郡瀬高町　　樺島　保雄

私の師範学校卒業は昭和１９年３月の筈であった。ところが、戦局がいよいよ逼迫し、卒業を待たずに学友が次々と予備学生や特別幹部候補生となり、出陣するという緊急事態となった。

急きょ卒業は半年繰り上げと決定された。私は一応教職には就いたものの、間もなく現役兵として佐世保海兵団に入団した。３ヶ月の新兵教育が終わり、すぐ艦船に配乗が決まるものとばかり思っていたのに、その時期はなかなかやっては来なかった。

やっと１９年１０月になったところで、航空母艦葛城（１万７０００ｔ）乗り組みの命を受けた。呉で乗艦したが、そこには厳しい艦隊勤務が私達を待ち受けていた。第２分隊２５㎜三連装機銃が私の配置であった。重い弾倉の運搬や着脱装訓練では指の生傷が絶えずつらかった。照準訓練では極度に緊張したものである。

ところで明けて２０年３月、突如アメリカ軍艦載機２００機の攻撃を受けることになった。私にとっては初めての戦闘体験であり、本物の米軍機を肉眼で見たのもこの時が最初であった。

まず我が艦の高角砲が一斉に火を噴いた。百雷が一時に落ちるとはこの音響かと思った。艦載機から投下された爆弾がまず艦首右舷そばの海中で炸裂した。艦が大きく揺れると共に高い水柱があがった。次は機銃に「撃ち方はじめ」の号令がかかった。『冷静に、冷静に……』と言い聞かせても、はやる気持を抑えることができなかった。また、艦が大きく震動したと思った時、発着甲板中央部に直撃弾が炸裂、甲板は大きくめくれあがった。また、次の瞬間には左高射機にも爆弾が命中した。私は危うく銃座からほうり出されそうな衝撃をうけたのである。

艦載機が飛び去ったあとの葛城の艦上は凄惨を極めていた。飛行甲板直撃弾の破片で副長（艦長の次の方）戦死。高射機（高角砲、機銃を一斉に電動作動により発射する装置）への直撃弾で、指揮官、向坂中尉の姿は五体の一片もとどめず消え失せていたし、高射機配置の将兵は全員が悲壮な戦死とわかった。艦橋や飛行甲板、飛行機格納庫、砲座、銃座にも数多くの将兵が自分の配置を死守した姿勢のままたおれていた。

私の機銃でも、梅野二等水兵が艦載機の機銃弾で肩から胸を貫かれて壮絶な戦死をとげた。ほんの先刻まで元気できびきびした動作で動きまわり、自分の職務に励んでいた梅野二等水兵の変わり果てた姿を目の前にしたとき、私は言い知れぬ空しさと同時に、腹の底から湧き出る敵愾心を覚えたものである。

戦闘は長時間だったような気がする反面、ほんの一瞬の時の流れでもあったように感じた。初めての対空戦闘はひとまず終わった。冷静さがもどり我にかえり海上を見わたすと、雑多の浮遊物が見られたのは異様な光景であった。また、まえは青かった海の色があちこちにこげ茶とも黒ともつかない濁り部分が見えたのにもおどろいた。海中に落下した爆弾の炸裂によって

できた濁りであろうと思った。

そのころ、私は右のひじのあたりにひりひりした痛みを感じた。見ると５～６㎝ほどの傷口から血が流れて出ていた。それまで痛くも掻ゆくもなかったことがむしろおかしくさえ思えた。極度に張りつめた精神状態の中での無痛の怪我も貴重な体験だったと思っている。

それにしても我が艦のこのような大被害にもかかわらず、米軍艦載機が火を噴いて落ちるのをこの目で見たのはたったの３機だけであった。この攻防で、近くで戦艦「榛名」が沈み、ほかに巡洋艦、駆逐艦の多くが沈んだり大破したりした。幸いにも葛城は大きな損害はうけたものの沈没は危うく免れた。

私は３回の対空戦闘を体験したが、幸い軽い右腕の負傷だけですんだのは本当に運が良かったと感謝している。そのあと佐世保海兵団へと配転となり、８月１５日の終戦の日を迎えることができた。現在の平和と幸せを思うとき、学業中ばにして出陣、戦死した優秀だった学友や海兵団、空母での多くの戦友の尊い犠牲があったことをかたときも忘れてはならないと心に言い聞かせている今の私である。